

元駐スイス大使

むら た みつ へい
村田光平 (83)

世界から

見えてきたのは

還るべき日本だった

に進路を定め、ラジオを聴きながら独学で外国語の習得に努めるようになったといひます。

高校卒業後は東京大学法学部に入学し、外交官試験の準備に多くの時間を割きつつ、英会話サークル「東京大学ESS」にも籍を置いていました。そこでの活動の一環として大学の全国英語討論大会に出場した際には準優勝という好成績を収め、さらに「仏教と平和」をテーマとした英語論文も執筆し、東本願寺から最優秀賞を贈られたこともあったそうです。

世界と日本を見つめる日々

そして大学卒業後の一九六一年には念願であった外務省に入省。外務省研修生として二年間のフランス留学を終えると、様々な役職を任せられます。

宮内庁に御用掛として出向した際には、天皇陛下下のフランス語通訳として国賓との会見などに立ち会いました。また陛下は植物について非常に詳しくあったため、「もしも自分の知らない知識が出てきた際にうまく通訳できるか」が当時の一番の心配事だったそうです。

さらに衆議院渉外部長時代には、衆議院議長とともに海外からの来賓の会談にすべて

立ち会い、中国の全国人民代表大会の事務局と衆議院事務局の交流を実現させました。

そうした職務に携わりながら、村田さんは三八年間の外交官生活のうち、実に一八年間を様々な国で過ごしました。

家族同伴の場合は子供たちを日本人学校に通わせて異文化に触れる機会を積極的に与え、また村田さん自身も、職業柄、常に幅広い知識が求められるため、海外生活のなかでも本や映画などから日々欠かさず情報を収集していたそうです。

そんな村田さんが原発について本格的に考えるようになったのは、一九八九年、セネガル大使に就任していた頃でした。

当時は一九八六年に発生したチェルノブイリ原発事故の記憶が色濃い時期であり、膨大な量の放射性物質が流出して近隣の多くの村が廃墟同然となりました。

その悲惨な光景に衝撃を受けた当時のセネガルの大統領アブドゥ・ダイウフは、自国への太陽光エネルギー導入を強く望み、依頼を受けた村田さんはそれを見事実現させます。

この経験から、良質かつ安全な自然エネルギーが得られる状況でありながら、危険性の高い原発を使用することに、村田さんは疑問を抱くようになりました。

いまだ記憶に新しい東日本大震災の影響により、今日に至るまで稼働の是非が議論されている原子力発電(以下「原発」)。

元外交官の村田光平さんは、そんな原発の危険性と「脱原発」の重要性を後世に伝えるべく、現在も各地で精力的に講演活動を続けています。

国家公務員として順風満帆なエリート街道を邁進していた村田さんが、「脱原発運動家」として第二の人生を歩むことになった経緯を辿ります。

国際的な視野の目覚め

村田さんは一九三八年に東京で生まれました。幼少期より相撲、水泳、野球、柔道といったスポーツが好きで、特に相撲は近所の大会でたびたび表彰されるほどの腕前でした。

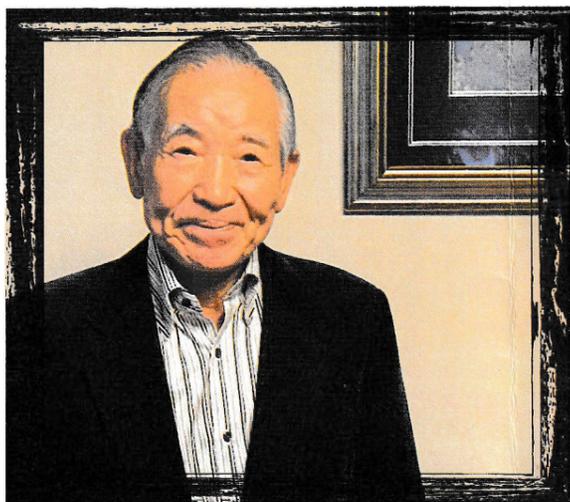
中学生・高校生の頃には、勉強の合間に古典文学を楽しんだり、所属していた野球部で主要メンバーに選ばれて神宮球場で試合をしたりと、まさに「文武両道」な青年時代を送っていたそうです。

またこの頃、大使館付属武官のカナダ人家族と知り合い、一緒に食事をするなどして親しい関係を築きました。これをきっかけとして、村田さんは国際的な視野を活かせる職業

そして一九九六年から三年間務めた駐スイス大使時代にはその疑問がさらに強くなったため、「IPPNW(核戦争防止国際医師会議)」のスイス支部共同創設者と交流を持ち、「脱原発」を訴え始めます。

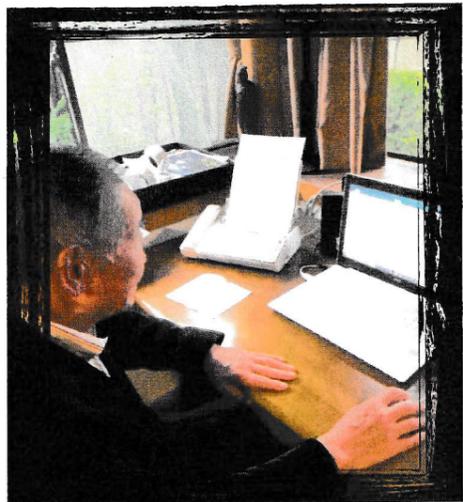
脱原発運動家としての歩み

現職の外交官という身分でありながら、「国策」である原発批判を始めることになった村田さん。当然、各方面からの風当たりは強かったといひます。



それが顕著に現れたのが、駐スイス大使在任中に脱原発や環境税の検討といったスイスの政策を評価する文書を発信した時のことでした。その文書について、一九九八年の閣僚会議で甘利明労働大臣(当時)から「大使が原子力政策に反対する文書を持ち回っている」と批判され、外務省の官房長からは厳しい注意を受けたそうです。この出来事は一九九九年四月一〇日付の朝日新聞朝刊に大きく報じられました。村田さんはむしろ「原子力タブー」の実態を世の中に広めるいきつけになったと語ります。

同年、スイス大使の任期終了後に外務省を退職した村田さんは東海学園大学の教授に



などにも言及し、改めて原発の危険性を訴えました。

「反骨外交官」の これまでとこれから

ここに記したこと以外にも、数多くの「脱原発運動」に取り組んできた村田さんが、現在は「東京五輪が福島事故に由来する放射能の危険性を無視し、事故隠しに利用されている」として東京五輪中止に向けての活動や、自身のセネガルでの体験を活かして原自連(原発ゼロ・自然エネルギー推進連盟)で自然エネルギーの推進活動にも力を注がれています。

そして最終的には「国連倫理サミット」を開催し、『力と支配に立脚する父性文明』から『倫理と連帯に立脚する母性文明』への移行と「公平かつ公明な社会」を実現させたいと語られました。

現下日本では、新型コロナウイルスが猛威を振るい、原発以上に先行きが見えない状況が続いています。長年世界から日本を見つめ続けてきた村田さんの眼は、暗闇を照らす光のように、いまもまっすぐに「未来」へと向けられています。

就任し、また学校に通うことができなくなった子供たちを支援する私塾「師友塾」で講演なども行うようになりました。そこでの子供たちとの交流や、当時の塾長である大越俊夫氏が結成した野球部の試合の応援に参加したことも忘れがたい思い出のようです。

同時に、外務省を離れてあらゆるしがらみから解放された村田さんは、「原子力タブー破り」を本格的に発信するべく再び動き出しました。

その最初の大掛かりな活動として、二〇〇二年五月二〇日付で元国土庁事務次官の下河辺淳氏、他五名の連名で「浜岡原発の運転停止を求める声明」を發出。そのための全国署名の発起人となった村田さんは、京セラ・稲盛和夫会長をはじめとする影響力のある著名人に発起人を引き受けてもらうように働きかけました。

また二〇〇五年六月には、スタンフォード大学で開催されたOBサミット総会に出席し、人権尊重の立場から原発の危険性を訴えました。

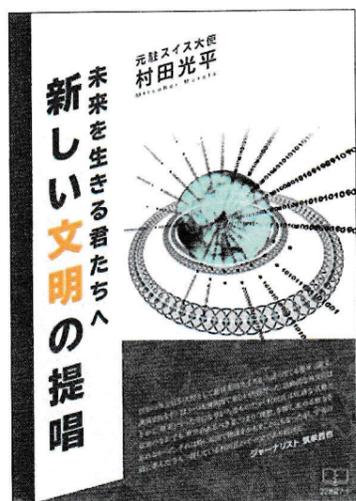
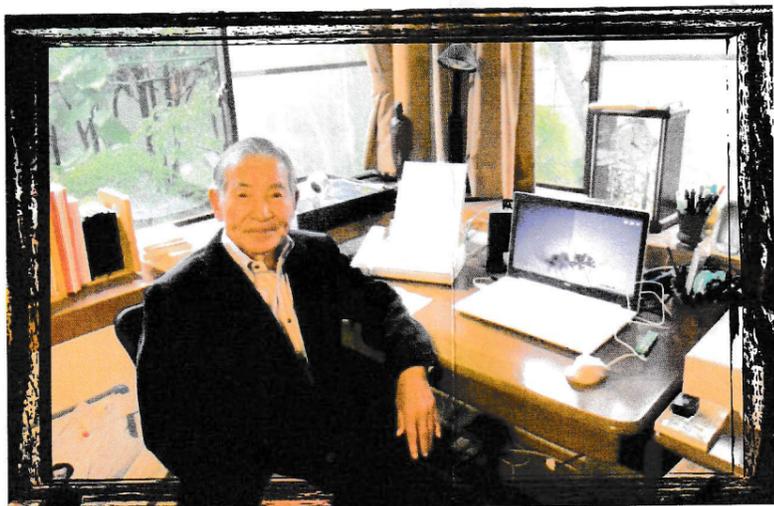
東日本大震災の発生

それから約六年後の二〇一一年三月十一日に、東日本大震災が発生。

当時村田さんは「地球システム・倫理学会」の常務理事として、各界の有識者らとともに世界の多様な問題を解決するための協議を重ねていました。そのようななかで、これまで喧伝されてきた「原発の安全性」の崩壊を目の当たりにすることとなったのです。これを受けて地球システム・倫理学会は、三月一日を「地球倫理の日」と定め、世界のすべての人びとが地球と文明の未来を考える反省の日とすることを提唱しました。

その年の五月には、菅直人総理(当時)の要請によって浜岡原発の運転停止が実現。これに関して村田さんは、先述の全国署名運動で集めた「百万人の署名が重要な背景になった」と述懐しています。

さらに翌年の二〇一二年三月二二日に、村田さんは参議院予算委員会の公聴会に招聘され、公述人として発言する機会を得ました。そこではまず東日本大震災を体験しながらも脱原発に躊躇する政策を「倫理の欠如」と痛烈に批判してから、国連倫理サミットの開催について潘基文国連事務総長(当時)より前向きな返書を受領したこと、またバラク・オバマ米大統領(当時)の「核のない世界」の支持を含む発信活動に対してルース駐日米大使(当時)より謝意が寄せられたこ



未来を生きる君たちへ 新しい文明の提唱

著者: 村田 光平
出版社: 株式会社22世紀アート
価格: ¥500